

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(4)

A general research on the child development on eating habits and teaching manners (4)

「秩父市における母親を対象とした子どもの食生活と躰に関する事例調査」

川合 貞子(E, 2), 千田真規子(E, 1), 猪俣美智子(B, a), 上里千穂子(B, b), 斉藤 尚子(1, A1), 武石 仁美・
福田 啓子(C, 1~9), 村木由紀子(D)

1. 調査の概要

(1)調査の概要

目的：秩父市における「子どもの食生活と躰」の実態を一地方都市の事例として把握する。

対象地域：埼玉県秩父市

対象者：秩父幼稚園の3・4・5歳児の母親122名

手続・方法：幼稚園を通して依頼し、幼児を持つ母親に対しての質問紙によるアンケート調査

時期：昭和59年11月21日～11月30日

調査項目：

- A.基本的属性(年齢, 就業状況, 職場, 学歴, 家族構成, 住居)
- B.食形態(食作法-食事場所, 食卓, 座席, 食器, 箸箱・箱膳の使用, 食事時間・回数, 所要時間, 用意とあと片づけ, 食法-調理時間, 献立, 外食)
- C.子どもの食行動(食事内容, 時間, 準備やあと片づけの手伝い, 食事の際の注意, 好き嫌い, 箸のもち方, 躰の主体)
- D.食習慣(行事食とその意味, 由来, 神棚や仏壇, 供物とその手伝い, 食事にまつわる故事)

回収状況： $\frac{123}{169} = 72.8\%$

(データ使用数は122部)

集計：質問項目毎の単純集計

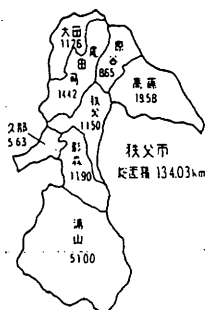
(2)対象地域の概況

調査対象地として選択した秩父市の地勢, 歴史的概容, 人口, 産業等の推移について, その特性を次に述べる。

①地勢

秩父市：

埼玉県の西北部, 秩父盆地の中心に位置する総面積134.03km²の産業観光都市である。東西に14.5km, 南北に26.6kmと細長い形をしており, 海拔は233.2m。市域の71%は山林で, 中央平坦地帯に商店街, 住宅地, 工場がある。経営耕地面積は田-252ha, 畑-476ha, その他-409haの計1137ha(S55. 2. 1現在「農業センサス」)である。



秩父市の東は横瀬村, 東秩父村, 南は荒川村及び東京都奥多摩町に接し, 西は小鹿野町, 吉田町, 北は皆野町に接しており, 秩父地域の商業・交通・教育・文化・医療等の都市的機能の集積地となっている。

昭和25年に市となり、同29年5月3日に原谷村、尾田蒔村を合併、続いて11月3日久那村を合併。同32年5月3日に高篠村、大田村を、翌33年5月3日に影森町を合併して現在の形となった。

②歴史的概容

チチブの名が最初に登場する古典は「旧事紀国造本記」で、崇神天皇の時代に「知知父国造」が置かれたことが記されている。その後、武蔵国の一部となり、また「知々父」から「秩父」の二文字が用いられるようになった。

秩父市には縄文時代からの遺跡が数多く存在する。中でも影森地区にある橋立鍾乳洞遺跡は有名で、縄文式文化から弥生式文化の遺物を出土している。古墳もたくさん発見されているが、完全な形で残っているものは少ない。

慶雲五年(708)、和銅を献上し、これを喜んだ天皇は、年号を和銅元年と改めた。秩父の人々は、その年における庸と調を免がれることができたという。

中世の頃になると「秩父氏」と名のる武士団が現われた。平安中期以降、律令制度がゆるんで、秩父でも名田や荘園が成立してくる。南北朝争乱期には混乱と荒廃を続け、永録12年7月(1569)には、上野方面から武田信玄が侵入、秩父郡内の著名な寺社が焼き払われた。

小田原北条氏が滅亡し、徳川家康が関東を支配するに至り、江戸時代が始まる。鉢形城は、天正18年(1590)に落成し、この城に所属していた小田原関係の武士の多くは、秩父郡に落居、落人となったその子孫が村役人などとなり、地方開発に従事している。秩父市の中心部は、この頃より「大宮郷」と呼ばれ、検地の実施によって浦山郷や蒔田村などの村名も現われてくる。

家康は秩父郡を直轄地としたが、大宮郷及びその周辺の村は、74年間の後に阿部豊後守忠秋の私領となった。161年間に渡って阿部氏が支配し、幕末までの45年間に松平氏が私領として支配した。

田の少ないこの土地においては、米ではなく

現金で年貢を納めている。このことは、現金収入につながる秩父絹の生産を高めていった理由の1つに考えられている。また「田畑の生産物は人口に比して少なく、食料の供給力は不足しており、金銭を払って他国の食料を求めねば」ならなかったという。

大宮郷には、絹買宿や秩父札所三十四ヶ所を巡拝する人々の順礼宿ができる。元禄の頃より大宮郷の中に町ができ始め、『新篇武蔵風土紀稿』が記される頃には、上町・中町・下町の三町で「大宮町」と呼ばれるようになった。一六の市や絹市が立ち、絹・楮・白大豆・黒大豆などが取引された。

明治に入り制度も変わって、農業、林業をはじめ、製糸、蚕種、絹織物業が飛躍的に発展する。明治16年に生糸価格が暴落し、大きな痛手を受けた農民たちは、高利貸等に負債延期運動を始め、自由民権運動と合流して、世にいう秩父事件が同17年11月に起こった。

明治の中頃、大宮郷は別所村を合併して「大宮町」となる。絹織物は家内工業から工場制生産に移行しつつあった。明治43年に着手された秩父鉄道の工事も、大正3年には熊谷-秩父の全線が開通する。

大正5年、大宮町は「秩父町」となった。

秩父セメント(株)は、大正14年に本格的操業を開始、時代の波に対応しながら生産力をあげて、現在ではセメント業界においても屈指の企業となった。

③人口・世帯の推移

大宮郷の人口は、貞元元年(1684)で914軒、2924人。天明5年(1786)3324人、天保5年(1834)3038人、元治元年(1864)3195人とされている。江戸時代を通じて人口の大きな変化はみられない。しかし、大宮郷の中にできた大宮町には、人口が集中し、都市化の勢いを示していた。

明治3年の壬申戸籍によると3595人、同33年には約2倍の6505人になる。10年後の明治43年には9709人と大きく増加する。

大正9年の国勢調査では、2522世帯、12,088

「子どもの食生活と健康についての総合的研究」(4)

人、平均世帯員数は4.8人となる。以後の推移は表のとおりで、大正から昭和の初期にかけて急増していき様子が示されている。

人口の推移 (その1)

表1-1

年次	世帯数	人 口			面積km ²	一世帯あたりの人員
		男	女	計		
大正 9年	2,522	5,947	6,141	12,088	11.50	4.8
14	3,375	8,037	7,936	15,973	//	4.7
昭和 5年	4,016	9,592	9,703	19,295	//	4.8
10	4,547	10,952	11,751	22,703	//	5.0
15	4,833	11,297	12,278	23,575	//	4.9
20	6,105	14,028	15,469	29,497	//	4.8
25	6,330	14,778	16,732	31,510	//	5.0
30	8,892	21,480	23,191	44,671	40.20	5.0
35	12,734	28,538	31,258	59,796	134.03	4.7
40	13,928	28,681	31,649	60,330	//	4.3
45	15,097	29,109	31,758	60,867	//	4.0
50	16,206	29,750	32,048	61,798	//	3.8
55	17,018	29,762	31,523	61,285	//	3.6

国勢調査 各年10月1日現在

表1-2 人口の推移 (その2)

年次	世帯数	人 口			備 考
		男	女	計	
昭和25年	6,330	14,778	16,732	31,510	市制施行
30	8,655	21,105	23,378	44,483	29年5月・11月
35	12,637	29,521	32,186	61,707	尾田蒔・原谷・久那村合
40	13,584	29,549	32,404	61,953	併
45	14,608	29,613	32,058	61,671	32年5月・33年5月
50	16,856	30,623	32,366	62,989	高篠・大田村・影森町合
51	16,929	30,668	32,316	62,984	併
52	16,996	30,739	32,193	62,932	
53	17,079	30,670	32,069	62,739	
54	17,198	30,508	31,861	62,369	
55	17,276	30,492	31,702	62,194	
56	17,432	30,457	31,600	62,057	
57	17,503	30,439	31,651	62,090	
58	17,712	30,434	31,625	62,059	
59	17,816	30,417	31,557	61,974	

住民登録人口 各年4月1日現在

近年の人口については、住民登録人口をみると、昭和50年を境に少しずつ減少している

にもかかわらず、逆に世帯数が増加していることから核家族化が進んでいることがわかる。

「子どもの食生活と娯についての総合的研究」(4)

④産業

●産業別就業者数の推移

表 1-3

各年10月1日現在

産 業	昭 和 50 年				昭 和 55 年				
	男	女	計	構成比(%)	男	女	計	構成比(%)	
第一次産業	農業・狩猟業	1,392	1,202	2,594	9.0	1,162	909	2,071	7.2
	林業・水産養殖業	113	11	124	0.4	123	13	136	0.4
		2	-	2	0.0	1	-	1	0.0
第二次産業	鉱業	242	13	255	0.9	256	21	277	1.0
	建設業	2,178	191	2,369	8.2	2,445	283	2,728	9.5
	製造業	5,931	4,440	10,371	36.0	5,611	4,056	9,667	33.5
第三次産業	卸売・小売業	3,196	2,524	5,720	19.9	3,305	2,697	6,002	20.8
	金融・保険業	266	286	552	1.9	280	271	551	1.9
	不動産業	45	17	62	0.2	64	31	95	0.3
	運輸・通信業	1,414	244	1,658	5.8	1,503	217	1,720	6.0
	電気・ガス・水道業	151	17	168	0.6	179	17	196	0.6
	サービス業	2,069	2,003	4,072	14.1	2,299	2,261	4,560	15.8
公 務	630	130	760	2.6	686	154	840	2.9	
分類不能の産業	50	36	86	0.3	8	7	15	0.1	
合 計	17,679	11,114	28,793	100.0	17,922	10,937	28,859	100.0	

「秩父市勢要覧83'」より

明治3年の大宮郷では、専業農家が64%、残りの36%が農業兼商業であった。農家は養蚕を副業とし、更にその片手間に糸をつむぎ、手織で絹を織っていたのである。明治の中頃から小規模な工場製産が始まり、有名な「秩父銘仙」も生まれた。

大正末期まで「婦女子の余力のある家は軒なみに賃機を織って」いたという。現在でも表1-4に示されるように、繊維工場が最も多いが、従業者数をみると電気機械や精密機械の事業所が一番多い。出荷額からみると、セメント・石灰を含む「窯業」がトップである。

●業種別事業所・就業者数等の状況 表 1-4

昭和55年12月31日現在

業 種 別	事 業 所 数			従 業 者 数			現金給与総額 (万円)	原 材 料 総 額 (万円)	製 造 品 出 荷 額 等 (万円)
	30人以上	29人以下	合 計	男	女	計			
昭和54年合計	38	480	518	4,316	3,316	7,632	1,458,323	5,066,557	9,130,811
昭和55年合計	37	467	504	4,231	3,312	7,543	1,591,901	6,823,847	11,219,228
18									
19食料品	1	45	46	129	120	249	34,785	90,394	180,974
20繊維	8	110	118	469	653	1,122	168,805	556,590	885,258
21衣服	4	52	56	206	355	561	74,537	432,737	658,992
22木材・木製品	2	37	39	287	77	364	66,497	247,038	429,921
23家具・装備品	-	39	39	123	28	151	17,614	44,706	81,159
24パルプ・紙	-	4	4	14	23	37	7,802	31,651	58,715
25出版・印刷	-	17	17	69	49	118	21,818	19,365	59,187
26化 学	-	5	5	39	25	64	7,401	3,641	14,736
27石油・石炭	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28ゴム製品	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29なめしがわ	-	6	6	9	22	31	3,121	6,567	12,014
30窯業	3	18	21	608	49	657	251,250	2,600,429	4,324,947
31鉄 鋼	1	5	6	320	21	341	132,222	585,095	774,017
32非 鉄 金 属	-	4	4	15	16	31	2,548	4,426	8,200
33金 属 製 品	2	18	20	163	77	240	45,947	36,735	111,575
34一 般 機 械	-	14	14	73	25	98	16,602	27,591	60,288
35電 気 機 械	9	29	38	802	895	1,697	330,328	778,986	1,340,493
36輸 送 機 械	1	15	16	96	79	175	31,411	77,249	127,455
37精 密 機 械	5	27	32	699	702	1,401	345,488	1,092,213	1,786,191
39その他の製品	1	22	23	110	96	206	33,725	188,434	305,106

「秩父市勢要覧83'」より

農家も専業は1割で、あとは兼業となっている。近年では民宿をしたり、ぶどう園・いちご園として観光に力を入れている。

参考・引用文献「秩父市誌」[秩父市勢要覧83]
「秩父市誌続編1・2」

2. 結果と考察

本論文以下の表について、実数は頻度(単位:人)を、()内の数字は%を示す。

A. 基本的属性

(1)対象者:122人

(2)性別:女性(園児の母親)

(3)平均年齢:33.0歳(父親-35.4歳)

(4)就業状況:

表A-1 単位:人

就業者	非就業者	無答	計
39 (32.0)	82 (67.2)	1 (0.8)	122 (100.0)

表A-2 ○職場

自宅	自宅外	無答	計
21 (53.8)	16 (41.0)	2 (5.1)	39 (99.9)

表A-3 ○勤務状況

常務	パート	その他	無答	計
20 (51.3)	5 (12.8)	9 (23.1)	5 (12.8)	39 (100.0)

表A-4 ○職業

専門・技術職	事務職	販売職	製造工程職	単純労働	サービス職	その他	計
8 (20.5)	6 (15.4)	9 (23.1)	2 (5.1)	1 (2.6)	11 (28.2)	2 (5.1)	39 (100.0)

秩父幼稚園児の母親における就業率は32%で、自宅が職場となっている場合が53.8%と、自宅外の41%よりもやや多くなっている。勤務状況は表A-3に示されるように、常勤が51.3%と半数を占め、パートタイムの12.8%との間に差が見られる。職業別では、「飲食業」や「レンタル商品の交換」などのサービス職が28.2%で最も多く、続いて販売職23.1%、専門・技術職が20.5%となっている。この地域の産業である織物製造業を家業としている人が2名あった。

(5)学歴:

表A-5

中学校	高等学校	専門学校	短期大学	大学	その他	無答	計
17 (13.9)	59 (48.4)	17 (13.9)	16 (13.1)	12 (9.8)	0	1 (0.8)	122 (99.9)

学歴については表A-5のように、中・高卒が62.3%で、それ以上の場合が36.8%となっている。

(6)家族構成:

表A-6

核家族	複合家族	無答	計
62 (50.8)	59 (48.4)	1 (0.8)	122 (100.0)

表A-7 ○家族の人数

3人以下	4人	5人	6人	7人	8人	9人以上	無答	計
8 (6.6)	42 (34.4)	29 (23.8)	21 (17.2)	15 (12.3)	4 (3.3)	0	2 (2.5)	122 (100.0)

表A-8 ○子どもの数

ひとりっ子	2人	3人	4人	5人	無答	計
12 (9.8)	65 (53.3)	37 (30.3)	6 (4.9)	0	2 (1.6)	122 (99.9)

家族構成は、核家族と複合家族がほぼ半数ずつの割合を示し、2件に1件は複合家族である。4人以下の家族は41%で、5~8人の家族が56.6%を占めている。子どもの数は、2人が53.3%と半数以上を占めて最も多く、続いて3人が30.3%となっている。

(7)住居:

表A-9

一戸建	マンション	団地	その他	無答	計
94 (77.0)	2 (1.6)	2 (1.6)	21 (17.2)	3 (2.5)	122 (99.9)

表A-10 ○部屋数(玄関・トイレ・浴室は除く)

2	3	4	5~6	7~8	9~10	11以上	無答	計
13 (10.8)	14 (11.5)	14 (11.5)	45 (36.9)	16 (13.1)	11 (9.0)	1 (0.8)	8 (6.6)	122 (100.0)

表A-9で明らかのように、一戸建に住んでいる人が77%と高率を示している。部屋数も5室以上が59.8%と多く、4室以下の33.7%との間に差が見られる。

B. 食形態

(a). 食作法

1 <食事場所>—「ふだん食事する場所が決まっていますか」

表B-1

決まっている	決まっていない	無 答	計
120 (98.4)	2 (1.6)	0	122 (100.0)

決まっている場合の場所

表B-2

勝手・台所					居 間			そ の 他	無 答	計
勝手	台所	食堂	キッチン	ダイニングキッチン	居 間	茶の間	リビングルーム			
3 (2.5)	10 (8.2)	14 (11.5)	3 (2.5)	3 (2.5)	38 (31.1)	40 (32.8)	2 (1.6)	7 (5.7)	2 (1.6)	122 (100.0)

<食事場所>については、まず「決まっている」との回答が98.4%で圧倒的に多い。しかし、決まっていた場合、その場所については、「茶の間」32.8%、「居間」31.1%で「居間」が多く、「勝手・台所」は少なかった。「その他」の中には、「朝食は台所・夜はリビングルーム・居間」、「夏期朝食のみ台所のテーブル」、「朝ダイニングキッチン・夜居間」、「食堂（春・夏）・居間（冬）こたつがあるため」等であった。「決まっていない」場合の理由として「父親の帰りが早い時は居間で、遅いときはテーブル」というのがあげられた。

2 <食卓>—「食卓は以下のどちらを使用ですか」

表B-3

	座 卓	テーブル	そ の 他	無 答	計
朝	83 (68.0)	37 (30.0)	2 (1.6)	0	122 (99.9)
夕	79 (65.0)	35 (29.0)	6 (5.0)	2 (1.0)	122 (100.0)

<食卓>については、朝・夕とも「座卓」が68.0%、65.0%と半数以上で、「テーブル」は30.0%、29.0%である。

3 <座卓>—「食事の時、ご家族の皆さんの座席は決まっていたですか」

表B-4

決まっている	決まっていない	無 答	計
117 (95.9)	3 (2.5)	2 (1.6)	122 (100.0)

表B-5 <座席のだいたい決まった理由>

	準備や片づけに便利	準備や片づけの手伝い	子どもの世話	話 上座を基準	に	なんとなく	テレビがよく見える	その他	無 答	計
父	1 (0.8)	0	9 (7.5)	31 (26.0)	38 (31.9)	18 (15.1)	5 (4.2)	17 (14.3)	119 (99.9)	
母	86 (72.3)	3 (2.5)	14 (11.8)	0	4 (3.4)	0	3 (2.5)	9 (7.6)	119 (100.0)	
祖父	1 (1.2)	0	2 (2.4)	11 (13.1)	5 (6.0)	6 (7.1)	3 (3.6)	56 (66.7)	84 (100.0)	
祖母	10 (10.6)	10 (10.6)	6 (6.4)	1 (1.1)	16 (17.0)	2 (2.1)	3 (3.2)	46 (48.9)	94 (99.9)	
子供	3 (0.9)	9 (2.7)	17 (5.1)	3 (0.9)	79 (23.5)	37 (11.3)	16 (4.8)	171 (50.9)	336 (100.1)	

その他：〈父親〉・「電話・入口に近い」、「台所がせまいので、広さにあわせて何となく」・〈母親〉・「一番かたづけやすい」・〈祖父〉・「自宅で食事・本人の希望（時間や、献立等の違い）」・「自宅で食事（病気療養の為）」・〈子ども〉・「母のとなり」。〈座席〉については、「決まっている」が95.9%とやはり圧倒的で、「決まっていない」が2.5%である。その理由をそれぞれみると、〈父親〉は、「なんとなく」が31.9%、「上座を基準に」が26.0%、「テレビがよく見える」が15.1%、「子どもの世話」が7.6%、「準備や片づけに便利」が0.8%、「準備や片づけの手伝い」が0%、〈母親〉は「準備や片づけに便利」が72.3%、「子どもの世話」が11.8%、「なんとなく」が3.4%「準備や片づけの手伝い」が2.5%と、圧倒的に準備や片づけに便利が多い。「上座を基準に」と「テーブルがよく見える」が0%、〈祖父〉は、「上座を基準に」が13.1%、「準備や片づけの手伝い」が0%、他は低率であった。〈祖母〉は、「なんとなく」が17.0%、他は低率である。〈子ども〉は、「なんとなく」が23.5%、「テレビがよく見える」が11.3%である。「決まっていない」場合の理由は「早い」順に好きなどこ

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(4)

ろにすわる」これらについて言えることは、上座・下座という家族のありかたがくずれ、伝統的な「イエ」制度のくずれがみられる。テレビの出現も大きな理由に入るとされる。「なんとなく」という漠然とした考えが多い。食事する場所においては、「勝手・台所」より「居間」の方が多というのも食事はただ単に食べるという食を満たす目的でなく、楽しみつつテレビをつけながら食事をとっていることである。食生活の変化がみられる。

4 <食器>—「後家族ひとりひとりの食器(箸・お茶わん・おわん等)が決まっていますか」

表B-6

決まっている	決まっていない	決まっているものと決まっていないものがある	無 答	計
115 (94.3)	6 (4.9)	0	1 (0.8)	122 (100.0)

<決まっている理由>

表B-7

大きさによって	衛生面を考慮して	お互いの存在を確認するため	習慣だから	その他	無 答	計
21 (16.9)	7 (5.6)	43 (34.7)	49 (39.5)	4 (3.2)	0	124 (99.9)

<食器>については、「決まっている」が94.3%、「決まっていない」が4.9%でほとんどの家庭は各自の食器は決まっていることになっている。その理由については、「習慣だから」が39.5%、「お互いの存在を確認するため」が34.7%、「大きさによって」が16.9%等である。<決まっていない>場合の理由には、「次男、長女だけ決まっている。後は同じものだから」、「子どもたちは決まっているが、大人はなんとなく」、「子どもは同じ型、柄のものを揃えて使わせています」、「みな同じ柄にして、人数分食事の度に出す方が簡単だから」、「子どもは決まっているが家では前から決まっていないのでそのままなんとなく決めていない」等である。

5 <箸箱>—「めいめいの箸箱を使っていますか」

表B-8

使っている	使っていない	無 答	計
6 (4.9)	116 (95.1)	0	122 (100.0)

<箸箱>では、「使っていない」が95.1%、「使っている」が4.9%と使用していないほうが多く、これはおそらく箸立てなるものにおさめていると思われる。

6 <箱膳>—「あなたは箱膳を使ったことがありますか」

表B-9

使ったことがある	使ったことがない	無 答	計
19 (15.6)	103 (84.4)	0	122 (100.0)

<年代>

表B-10

525以前	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	無 答	計
0	2 (10.5)	8 (42.1)	5 (26.3)	1 (5.26)	1 (5.26)	1 (5.26)	0	1 (5.26)	19 (100.0)

<箱膳>については、「使ったことがない」が84.4%と圧倒的に多く、「使ったことがある」が15.6%である。<年代>をみると「昭和30~34年頃」が42.1%と多く次に「昭和40~44年頃」の26.3%、「昭和25~39年頃」の10.5%、で他の年代は差はなかった。<場所>においては埼玉県秩父地方が5家族で無答が1家族である。

7 <食事回数>—「毎日の食事は、朝・昼・夕の3回ですか」

表B-11

はい	いいえ	無 答	計
120 (98.4)	2 (1.6)	0	122 (100.0)

これについては、「朝・昼・夕の3回」という

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(4)

回答が98.4%で、「いいえ」は1.6%と圧倒的に3回食が定着している。

8 <食事時間>—「食事の時間は何時頃ですか。またどのくらいの時間を必要としますか」

<食事開始時刻>— (時：分)

表B-12

	5:30	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	無答	計
朝	0	9 (7.5)	0	37 (30.8)	54 (45.0)	17 (14.2)	1 (0.8)	2 (1.7)	120 (100.0)
夕	3 (2.5)	26 (21.5)	42 (34.7)	34 (28.1)	9 (7.4)	3 (2.5)	0	4 (3.3)	121 (100.0)

<食事時間>— (分)

表B-13

	10~15	15~30	30~60	60以上	無答	計
朝	37 (30.3)	76 (62.3)	8 (6.6)	0	1 (0.8)	122 (100.0)
夕	1 (0.8)	38 (31.1)	75 (61.5)	6 (4.9)	2 (1.6)	122 (99.9)

<食事開始時刻>については、<朝>は「7時30分」が45%、「7時」が30.8%、で7時から7時半の間に、<夕>は「6時30分」が34.7%、「7時」が28.1%、「6時」が21.5%で、6時から7時の間にとられていることがわかる。<食事時間>については、<朝>は「15分~30分」が62.3%、「10分~15分」が30.3%で、<夕>は「30分~60分」が61.5%、「15分~30分」が31.1%である。<朝食>は、7時代で30分位で、<夕食>は、6時から7時の間で60分位食事に時間を要していることがわかる。

9 <食事状況>—「食事の際はたいていご家族が全員そろいますか」

表B-14

	はい	いいえ	無答	計
朝	64 (52.5)	58 (47.5)	0	122 (100.0)
夕	85 (69.7)	36 (29.5)	1 (0.8)	122 (100.0)

この項目については、<朝>は「はい」が52.5%、「いいえ」が47.5%、<夕>は「はい」が69.7%、「いいえ」が29.5%となり、朝食は半数がそろっていると答え、夕食では、全員揃っているという回答が「いいえ」の2倍以上であり、一緒に食事をしていることがわかる。

その理由について <朝>

いいえの場合 一の関係で

表B-15

主人の勤務	私の勤務	子どもの通学・通園	その他	無答	計
25 (43.1)	1 (1.72)	18 (31.0)	5 (8.6)	9 (15.5)	58 (99.9)

~の時が多い

表B-16

主人が不在	私が不在	子どもだけ	その他	無答	計
25 (39.1)	1 (1.6)	9 (14.1)	9 (14.1)	20 (31.2)	64 (100.0)

<夕>

~の関係で

表B-17

主人の勤務	私の勤務	子どもの通学・通園	その他	無答	計
28 (57.1)	0	0	3 (6.1)	18 (36.7)	49 (99.9)

~の時が多い

表B-18

主人が不在	私が不在	子どもだけ	その他	無答	計
23 (46.9)	0 (0)	2 (4.1)	2 (4.1)	22 (44.9)	49 (100.0)

「いいえ」の場合、その理由には、<朝>については、「主人の勤務」の関係で57.1%、「主人が不在」の時が39.1%のケースが多い。<夕>については、「主人の勤務」の関係で57.1%で、「主人が不在」が46.9%と朝も夕も、主人の勤務の関係で主人が不在のケースが多い。以上のことから、父親不在で食事がなされていることである。

いいえの場合の「朝食」でその他の場合は、祖

母・子供の叔母の勤務の関係、祖父母は朝が遅い為、祖母・子供の叔母が不在の時が多い等であり、「夕食」では、子供が、火・木・土に剣道・店の都合・祖母・子供の叔母の勤務の関係、祖母・子供の叔母が不在の時が多い等の理由である。

10<食事の用意とあと片づけ>-「食事の用意とあとかたづけについての役割は」

表B-19

	私の役割	主人の役割	(祖)父母が分担	その他	無 答	計
用 意	113 (92.6)	0	2 (1.6)	6 (4.9)	1 (0.8)	122 (99.9)
あと片 づけ	104 (85.2)	0	7 (5.7)	7 (5.7)	4 (3.3)	122 (99.9)

ここでは、<用意>、<あと片づけ>共に「私の役割(回答者)が92.6%、85.2%と圧倒的に多く、「主人の役割」は0%である。

B. 食法

11<調理時間>-「夕食の調理時間はおよそどのくらいかかりますか」

表B-20

~30分	30~60分	1時間~ 1時間半	1時間半 ~2時間	2時間~	無 答	計
5 (4.1)	59 (48.4)	53 (43.4)	4 (3.3)	1 (0.8)	0	122 (100.0)

夕食の<調理時間>については「30~60分」が48.4%、「1時間~1時間半」が43.4%となりこれら双方を合計すると9割以上となる。一方「~30分」・「1時間半~2時間」については3~4%程度となっている。調理時間が短い家庭は利便的調理志向であり他方、調理に多くの時間を費やしている家庭は手づくり志向であると推測され、これら二者が同比率であったことは現代の食生活における平均的な姿を投影しているといえよう。

12<献立>-「献立は以下のどの点を優先的に考慮されましたか」

表B-21

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	無 答	計
栄養のバランス	41 (33.6)	43 (35.3)	15 (12.3)	8 (6.6)	0	5 (12.3)	122 (100.0)
経済面	18 (14.8)	16 (13.1)	39 (32.0)	33 (27.0)	3 (2.5)	13 (10.7)	122 (100.0)
調理方の簡便さ	6 (4.9)	14 (11.5)	30 (24.6)	55 (45.1)	0	17 (13.9)	122 (100.0)
家族の好み	47 (38.5)	32 (26.2)	21 (17.2)	9 (7.4)	0	13 (10.7)	122 (100.0)
その他	1 (0.8)	1 (0.3)	1 (0.8)	0	5 (4.1)	114 (93.4)	122 (99.9)

「家族の好みでだれを優先しますか」

夫の好み	子ども	祖父母	自分	その他	無答	計
36 (29.5)	43 (35.2)	9 (7.4)	3 (2.5)	5 (4.1)	26 (21.3)	122 (100.0)

<献立>に最も考慮される点としては「家族の好み」の38.5%があげられ、二番目には「栄養のバランス」の33.6%がさらに三番目には「経済面」が「調理方の簡便さ」については4番目に考慮されているという結果となった。また、家族の好みで優先されるのはやはり「子ども」の35.2%であり、次いで「夫の好み」の29.5%となり「自分」については2.5%と低い値であった。

これらを総合してみると「家族の好み」・「栄養のバランス」についてはかなり高い割合で献立に盛り込まれておりそれらが子ども達にどう反映しているか考えあわせると興味深い結果である。

13<調理>-「あなたは好んで調理なさるほうですか」

表B-22

大好き	すきなほう	どちらとも いえない	あまり好き ではない	きらい	無 答	計
3 (2.5)	65 (53.3)	44 (36.1)	9 (7.4)	1 (0.8)	0	122 (100.1)

本項目に関しては、「どちらともいえない」との回答が36.1%となっており「あまり好きではない」については7.4%となりこれら双方を合計すると4割以上の値となる。反面、調理が「すきなほう」との回答は53.3%、「大好き」では2.5%となりあわせて55.8%となり過半数以上の人が調理が好きであると回答している。つまり、料理愛好型ともいえ好ましい結果と考えて

良からう。

14 <外食>- 「ご家族で外食をされますか」

表B-23

することが多い	時々する	あまりしない	全くしない	無答	計
7 (5.7)	70 (57.4)	39 (32.0)	6 (4.9)	0	122 (100.0)

「外食をすることが多い・時々する」理由

主婦の調理からの解放	家族の気分転換	主人の帰宅が遅い	おいしいものを食べる	その他	無答	計
13 (16.9)	41 (53.2)	1 (1.3)	20 (26.0)	7 (9.1)	0	84 (106.5)

複数回答

「外食をあまりしない・全くしない」理由

主人が自宅で食べたがる	子どもがさわい他人に迷惑	食費を節約するため	その他	無答	計
20 (44.4)	8 (17.8)	8 (17.8)	18 (40.0)	0	54 (120.0)

複数回答

<外食>については、6割以上の方が「することが多い」ないしは「時々する」と回答している。反面、「あまりしない」の36.1%と「全くしない」の4.9%の双方を合計すると4割程度となる。これらの事から外食産業への依存傾向がややみられる程度であるといえる。外食をする理由については、やはり「家族の気分転換」が53.2%と突出し次いで「おいしいものを食べる」の26%となり3番目には「主婦の調理からの解放」の16.9%があげられた。

他方、外食をしない理由としては、「主人が自宅で食べたがる」の44.4%を筆頭に「その他」の40.0%と続いている。4割近くあった「その他」の内容としては「外食の習慣がない」とか「祖父母と同居の為」さらには、「ぶだんの日には家族全員が同じ時間に食事が出来ないの」等があげられこれらの事はこの地域の特性の一端を知るうえで付記しておく必要がある。

15 <既製食品>- 「既製の弁当、惣菜、冷凍、インスタント食品などをどう思われますか」

表B-24

よく使う	時々使う	あまり使わない	全く使わない	無答	計
6 (4.9)	80 (65.6)	33 (27.1)	1 (0.8)	2 (1.6)	122 (100.0)

「既製食品をよく使う・時々使う」理由

便利だから	安いから	おいしいから	別の味を取り入れたい	その他	無答	計
64 (74.4)	4 (4.7)	2 (2.3)	13 (15.1)	7 (8.1)	0	90 (104.6)

複数回答

「既製食品あまり使わない・全く使わない」理由

使いなれていない	栄養価が低い	食品添加物に不安が	心がこもらない	その他	無答	計
3 (8.8)	3 (8.8)	16 (47.1)	14 (41.2)	9 (26.5)	0	45 (132.4)

複数回答

これについては、上表の如く7割程度の方が「よく使う」ないしは「時々使う」と回答しており、その理由として「便利だから」の74.4%は群を抜いており、他に「別の味をとり入れたい」の15.1%等があげられる。

一方、「既製食品」をあまり使わないとの回答は3割弱であり主な理由として「食品添加物に不安」の47.1%や「心がこもらない」の41.2%でその大半を占めた。しかし、総体的にみた場合、本項目においても既製食品への依存傾向が伺えるがあくまでも「時々使う」程度の家庭が多いという事も付加すべきであろう。

16 <健康食品>- 「最近流行の自然・健康食品については、どう思われますか」

表B-25

愛好している	時々ためす	ほとんど用いない	全く用いない	無答	計
8 (6.6)	48 (39.3)	44 (36.1)	21 (17.2)	1 (0.8)	122 (100.0)

「健康食品を愛好している理由」

健康維持に効果がある	添加物の心配がないから	周囲で普及しているから	その他	無答	計
12 (21.4)	37 (66.1)	4 (7.1)	5 (8.9)	1 (1.8)	59 (105.3)

複数回答

「健康食品を用いない理由」

効果がある と思えない	おいしくな いようなの で	食費が高く つく	その他	無 答	計
38 (58.5)	5 (7.7)	7 (10.8)	7 (10.8)	11 (16.9)	68 (14.7)

複数回答

本項目については「愛好している」・「時々ためす」等肯定的回答の合計が45.9%であるのに対し「ほとんど用いない」・「全く用いない」等否定的回答の合計が53.3%となり過半数以上の人が健康食品に関して否定的な見解を持っている点は注目に値する。これらを利用する理由としては、「添加物の心配がないから」の66.1%があげられており、一方、利用しない理由としては、「効果があるとは思えない」の58.5%が主で「食費が高くつく」の10.8%等もあげられた。ここでも経済的理由ではなく精神的理由でそれらを用いておらず、効果があるかどうかかわからないものは使用しないという実質的な思考の一端を伺い知ることができるといえよう。

17 <食材料>—「穀類や野菜・果物などお宅でとれるものがありましたら多少にかかわらず種類・場所を記入して下さい」

表B-26

数 類	米	とうもろこし	小麦	そば											
	4 (3.3)	3 (2.5)	2 (1.6)	1 (0.8)											
野菜類 いも類	なす	24 (19.7)	21 (17.2)	19 (15.6)	17 (13.9)	14 (11.5)	13 (10.7)	13 (10.7)	19 (15.6)	9 (7.4)	9 (7.4)	4 (3.3)			
	白菜	7 (5.7)	7 (5.7)	7 (5.7)	7 (5.7)	6 (4.9)	5 (4.1)	5 (4.1)	5 (4.1)	5 (4.1)	5 (4.1)	4 (3.3)			
	ブロッコリー	2 (1.6)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)			
	トマト	2 (1.6)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)			
果物類	柿	22 (18.0)	10 (8.2)	6 (4.9)	3 (2.5)	3 (2.5)	3 (2.5)	2 (1.6)	2 (1.6)	2 (1.6)	1 (0.8)	1 (0.8)			
	その他	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)			

複数回答

表B-27 食材料栽培場所

自分の庭	菜園	耕地	その他	無答	計
33 (27.0)	3 (2.5)	18 (14.8)	2 (1.6)	66 (54.1)	122 (100.0)

これらについては、前表の如く、穀類の栽培

は比較的少なく米については3%程度しか栽培されておらず、野菜については「なす・葱・トマト」などが多く栽培されており「プチトマト・ブロッコリー」など西洋野菜等の栽培も幅広くみられる。果物については低い値であるが種々の果物類が栽培されている。栽培場所としては「自分の庭」が27%で次いで「耕地」の14.8%となり自宅の庭等を利用して余り手をかけず簡単に栽培していることがわかる。

18 <食内容>—「お子さんの一日の食事内要らないし献立を教えてください」

表B-28

	朝食	昼食	夕食
ごはん・(みそ汁)・副菜1~2品	47 (38.5)	4 (3.3)	2 (1.6)
ごはん・(みそ汁)・主菜の肉類のみ	3 (2.5)	17 (13.9)	1 (0.8)
ごはん・(みそ汁)・主菜の魚類のみ	10 (8.2)	1 (0.8)	1 (0.8)
ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類	8 (6.6)	44 (36.1)	25 (20.5)
ごはん・(みそ汁)魚類・野菜類	10 (8.2)	10 (8.2)	18 (14.8)
パン・(牛乳又はスープ)・副菜1~2品	21 (17.2)	3 (2.5)	0
パン・(スープ)・肉類のみ	7 (5.7)	2 (1.6)	1 (0.8)
パン・(スープ)・魚類のみ	1 (0.8)	0	0
パン・(スープ)・肉類・野菜類	1 (0.8)	5 (4.1)	0
パン・(スープ)・魚類・野菜類	0	1 (0.8)	0
類 類	0	4 (3.3)	1 (0.8)
麺類・副菜1~2品	0	1 (0.8)	7 (5.7)
その他	8 (6.6)	22 (18.0)	55 (45.1)
無 答	6 (4.9)	8 (6.6)	11 (9.0)
計	122 (100.0)	122 (100.0)	122 (100.0)

本項目の朝食については、「ごはん・(みそ汁)・副菜1~2品」が38.5%と多数を占め、次いで「パン・(牛乳又はスープ)・副菜1~2品」の17.2%となり朝食のごはん党は64%となっておりパン党は24.5%となりごはん党がパン党の2.5倍以上であった。主菜については「肉類」が15.6%・「魚類」が17.2%となり「魚類」がやや多いという結果を得た。

昼食については「ごはん・(みそ汁)・肉類・

野菜類」が36.1%と高い値を示し、次いで「その他」が18%さらに「ごはん・(みそ汁)・肉類のみ」のパターンが13.9%であった。ここでもごはん党が多くパン党は9%程度で低い値となり、主菜については肉類が多かった。

夕食に関しては、「その他」の回答が45.1%と多くこれは「カレーライス、スキヤキにうどん、手巻ずし、お好み焼き」などかなり変化に富んだ献立内容である。次いで「ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類」のパターンが20.5%と多く夕食にパンを食している家庭は0.8%とかなり低い値であった。

これらを総合してみるとパン党は朝食に24.5%とやや多いものの平均すると10%程度となり逆にごはん党は過半数以上の値を占めた。主菜については魚類が14%前後であるのに対し肉類は30%以上であった。前表で最も象徴するパターンは昼食の「ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜」の36.1%であり、夕食では「その他」の45.1%となりこれらは和洋折衷であった。そしてこれらの食内容は子どもの食嗜好を端的に示したものであるといえよう。

以上食法について要約しうることは「調理時間」・「献立」・「食内容」等の調査結果からも現代の食生活における平均的な姿が浮かびあがる。外食産業・健康食品に依存するばかりでなく一般的に実質重視の家庭が多いと考えられよう。さらに、料理愛好型が比較的多く家庭からの手づくりの味が子どもの食意識にどう影響していくか今後期待したい。

C. 食行動

1. お子さんが食べるまでに要する時間はだいたいどの位でしたか。

表C-1

	10~15分	15~30分	30~60分	60分~	無答	計
朝食	46 (38.3)	66 (55.0)	6 (5.0)	1 (0.8)	1 (0.8)	120 (100.0)
夕食	1 (0.8)	70 (58.3)	42 (35.0)	5 (4.2)	2 (1.7)	120 (100.0)

朝食では、「15~30分」(55.0%)が半数以上を占め、次に「10~15分」(38.3%)となる。

夕食では、朝食同様に「15~30分」(58.3%)が最も多いが、2番目に「30~60分」(35.0%)となり、「60分~」(4.2%)と続く。朝食と比べて「10~15分」がわずか0.8%となるが、これは、農村の11.8%と比較してもかなり減少していることがわかる。すなわち、ここでも夕食には、朝食以上に時間をかけて、家族の会話を中心としながら食事をしているといえよう。

2. 食事の用意やあと片づけについて、お子さんに手伝わせますか。

(1) 用意について

表C-2

食器を並べる程度	もりつける	ほとんどさせない	全くさせない	その他	無答	計
72 (60.3)	4 (3.3)	32 (26.7)	6 (5.0)	4 (3.3)	2 (1.7)	120 (100.0)

(2) あと片づけについて

表C-3

自分の食器だけ運ばせる	他の食器も運ばせる	食器を洗わせる	食器棚にしまわせる	ほとんどさせない	全くさせない	その他	無答	計
67 (55.8)	19 (15.8)	0	0	25 (20.8)	2 (1.7)	7 (5.8)	0	120 (100.0)

食事の用意については、「食器を並べる程度」(60.0%)が最も多く、「ほとんどさせない」(26.7%)、「全くさせない」(5.0%)をあわせ約32%となる。

あと片づけでは、「自分の食器だけ運ばせる」(55.8%)あるいは、「他の食器も運ばせる」(15.8%)と用意以上に手伝いをさせていることがわかるが、「ほとんどさせない」(20.8%)、「全くさせない」(1.7%)と用意同様、子どもにあまり手伝いはさせていないということがいえるであろう。

3. 食事のしつけについて、特に留意する事柄を以下から(4~5項目ぐらい)お選び下さい。

表C-4

A	B	C	D	E	F	G	無答	計
36 (30.0)	80 (66.7)	60 (50.0)	61 (50.8)	109 (90.8)	33 (27.5)	10 (8.3)	0	389 (324.2)

- A. 朝食の前に顔を洗わせる 複数回答
 B. 朝食の前に着がえさせる
 C. 手を洗わせる
 D. 毎食後に歯をみがかせる
 E. あいさつ(「いただきます、ごちそうさま」等の唱和やお祈り)をさせる
 F. 家族そろってから食べさせる
 G. その他

あいさつをさせるわけ

表C-5

a	b	c	d	無答	計
71 (65.1)	27 (24.8)	6 (5.5)	3 (2.8)	10 (9.2)	117 (107.4)

- a. 習慣として 複数回答
 b. 両親や作物, 食物をつくってくれた人達に感謝するため
 c. 神, 仏に感謝するため
 d. その他

食事のしつけについて最も多かったのは、「あいさつをさせる」(90.8%)であり、ほとんどの家庭で留意されている。そして、その理由では、「習慣として」(65.1%), 「両親や作物, 食物をつくってくれた人達に感謝するため」(24.8%)と続く。農村に比べ両親あるいは神, 仏に感謝することが多いのは興味深い結果であるが、いずれにせよ、あいさつを重視しているといっても、そこに特別な意味づけはされていないようである。

しつけについて2番目に多かったのが、「食事の前に着がえさせる」(66.7%)であり、「毎食後に歯をみがかせる」(50.8%), 「手を洗わせる」(50.0%)と続く。また、「家族そろってから食べさせる」(27.5%)は、その他の項目で見られる「なるべくそろってからとは思いますが仕事が遅くなったら子供に先に食べさせる」「主人の帰りが遅いので子供と先に食べる」などの声とあわ

せ考えると、子ども中心に食事が行われていることを示唆している。

4. 食事中お子さんに特に注意する事柄について○をつけて下さい。

表C-6

ひじをついて食べない	姿勢正しく座わる	寝ころばない	立ち歩かない	大きな声で話をしない
73 (60.8)	73 (60.8)	42 (35.0)	45 (37.5)	14 (11.7)

キョロキョロわき見をしない	クチャクチャとかむ音をたてない	迷い箸をしない	箸をごはんに立てない	こぼさない
7 (5.8)	33 (27.5)	18 (15.0)	41 (34.2)	43 (35.8)

残さない	好き嫌いをいわない	その他	無答	計
61 (50.8)	65 (54.2)	3 (2.5)	0	518 (431.7)

ここでは、「ひじをついて食べない」(60.8%), 「姿勢正しく座わる」(60.8%)などの食事の態度や姿勢が重視されている。また、「残さない」(50.8%), 「こぼさない」(35.8%)など食べ物を大切にすること、さらに、「好き嫌いを言わない」(54.2%)は、子どもの栄養面なども考えられている。

迷信的なことでは、「箸にごはんをたてない」が決して多くはないが32.4%を占めていることは、古くからの言い伝えが今だに重視されていることをうかがわせる。

5. 食事の際、次のような場合にはお子さんにどのように注意なさいますか。

- (1) 床や畳にこぼしたら

表C-7

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無答	計
0	58 (47.5)	57 (46.7)	1 (0.8)	6 (4.9)	122 (100.0)

- (2) 食卓の上にこぼしたら

表C-8

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無答	計
18 (14.8)	44 (36.1)	49 (40.2)	4 (3.3)	7 (5.7)	122 (100.0)

「子どもの食生活と嫉についての総合的研究」(4)

(3) 口のまわりや衣服につけた時

表C-9

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無答	計
8 (6.6)	45 (36.9)	52 (42.6)	7 (5.7)	10 (8.2)	122 (100.0)

(4) 食べ残した時

表C-10

食べさせる	無理には食べさせない	注意する・食べさせたかは不明	その他	無答	計
19 (15.6)	23 (18.9)	54 (44.3)	14 (11.5)	12 (9.8)	122 (100.0)

(5) 好物が出されてその量が少ないと不満を言った時

表C-11

あげる	あげない	注意する・納得させる	その他	無答	計
24 (19.7)	16 (13.1)	56 (45.9)	9 (7.4)	17 (13.9)	122 (100.0)

(1)においては、「ひろわせる」(47.5%)、「注意をする」(46.7%)がほぼ同数であり、「食べさせる」は0となる。(2),(3)も,(1)と同様に、「ひろわせる」「注意をする」が主であるが,(2)では、「食べさせる」が14.8%、3)では、6.6%みられる。いずれにせよ、食べさせることは、衛生面上からの配慮に加えて、食糧の豊富さも反映しているといえるだろう。

(4)では、「注意する」(44.3%)、「無理には食べさせない」(18.9%)、「食べさせる」(15.6%)となり、その他の内容では、注意しない、親が食べる、などが多くみられた。

(5)では、「注意する、納得させる」(45.9%)と最も多く、「あげる」(19.7%)、「あげない」(13.1%)と続く。

全体的にみると、注意をするということがどの項目においても多く、子どもに対して、何らかの注意や説明することによって納得させることを重視し、無理におしつけたり、行動させることは少ないことがわかる。

6. お子さんは食べ物に好き嫌いがありますか。

表C-12

ある	ない	無答	計
73 (60.8)	45 (37.5)	2 (1.7)	120 (100.0)

表C-13

野菜	生野菜	ピーマン	ネギ	トマト	にんじん	きのこ類	しいたけ
21	6	19	6	9	3	1	1
なす	きゅうり	玉ねぎ	いんげん	肉	レバー	さしみ	卵
2	1	2	1	7	2	2	5
牛乳	納豆	あんこ	つけもの	魚	その他	無答	計
1	2	1	1	3	3	0	99

複数回答

(2) 嫌いな食べ物がある場合、あなたはどのように対応しておられますか。

表C-14

偏食しないように調理を工夫した	「身体によいから」などと注意した	一口でも必ず食べさせた	しいて食べさせない	その他	無答	計
23 (31.5)	29 (39.7)	14 (19.2)	14 (19.2)	3 (4.1)	0	83 (113.7)

複数回答

好き嫌いについては、「ある」(60.8%)、「ない」(37.5%)となる。嫌いな食べ物では野菜類に偏り、特にピーマンが多い。

これらの対応策としては、「身体によいからなどと注意した」(39.7%)、「偏食しないように調理を工夫した」(31.5%)、「一口でも必ず食べさせた」(19.2%)、「しいて食べさせない」(19.2%)となっている。子どもに嫌いな食べ物があっても、注意をしたり、調理の工夫をしたりするなど、直接子どもに無理強いすることは少ない。すなわち、子どもが努力することより、親の努力に重点が置かれているということがいえる。

7. 箸の持ち方については

表C-15

親を見習わせる	手をとって教える	言葉で説明する	注意しない	その他	無答	計
30 (25.0)	55 (45.8)	20 (16.7)	7 (5.8)	15 (12.5)	1 (0.8)	128 (106.7)

複数回答

ここでは、「手をとって教える」(45.8%)が半数近くを占め、次に「親を見習わせる」(25.0%)、「言葉で説明する」(16.7%)となり、具

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(4)

体的に手をとって教えている親が多い。さらに、親を見習わせたり、言葉で説明したりと、箸の持ち方については、かなり関心が向けられている。

8. 食事中テレビをつけておられますか。

表C-16

はい	いいえ	無答	計
60 (50.0)	58 (48.3)	2 (1.7)	120 (100.0)

いいえの理由

表C-17

家族の会話が失われる	子どもが食事に集中できない	子どもの食事に対する感謝の気持ちがうすれる	その他	無答	計
12 (20.7)	48 (82.8)	5 (8.6)	5 (8.6)	5 (8.6)	75 (129.3)

複数回答

食事中テレビをつけているのとつけていない数は、「はい」(50.0%)、「いいえ」(48.3%)とほぼ同数であり、つけない理由としては「子どもが食事に集中できない」(82.8%)が非常に多い。

先にも述べたように「食事中は静かに、きちんとして食べる」ということよりも、楽しく会話をしたり、時間をかけて食べることが一般的になってきているが、その背景には、テレビをみながら、食事をする家庭が増えてきているということも考えられるだろう。

9. 食事のしつけについてお宅では

(1) その程度

表C-18

きびしい方だ	かなり心がけている	どちらともいえない	あまりしない方だ	全くしないと言ってもよい	無答	計
8 (6.6)	66 (54.1)	35 (28.7)	11 (9.0)	0	2 (1.6)	122 (100.0)

(2) 食事のしつけの主は

表C-19

主人	私	父	母	その他	無答	計
10 (8.2)	95 (77.9)	1 (0.8)	3 (2.5)	12 (9.8)	1 (0.8)	122 (100.0)

(1)では、「かなり心がけている」(54.1%)「きびしい方だ」(6.6%)と半数以上が子どものしつけについて積極的な姿勢を示している。しつけの主については、「私」つまり母親が77.9%と最も多く、幼児の食事のしつけがほとんど母親にまかされていることがわかる。その他においては、私(母親)と母(祖母)、私(母親)と主人(父親)の両者が主となっている家庭もみられた。

以上、子どもの食行動についてその結果を中心に述べてきた。要約すると、戦前戦後に比べ食糧も豊富になり、食事のしつけについても、「食べる」だけの生活から、衛生面や栄養面を考慮したものへ変化してきた。そして、子どもに対しても、ことばで説明する、注意をするということに重点がおかれ、強制的におしつけたり、行動をさせるということは少なくなっている。しつけの程度としては、かなり積極的な姿勢がみられるが、子どもに対するの努力を望むより、むしろ、親の努力が多くみられるのである。

また、食事の際の「唱和」においては、農村地域より、積極的に行なわれていることがわかるが、その理由としても、「感謝の気持ち」がわずかではあるが多くなっていることも興味深く、食の伝統的意義があらためて見直されてきたともいえよう。

D. 食習慣

1 <行事食>—「(年中) 行事の日には、特別に食事を作ってあげますか」

表D-1

	必ず作る	時々作る	どちらとも言えない	ほとんど作らない	全く作らない	無 答	計
お正月	114 (93.4)	3 (2.5)	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0)	3 (2.5)	122 (100.0)
ひなまつり	34 (27.9)	32 (26.2)	6 (4.9)	28 (23.0)	13 (10.7)	9 (7.3)	122 (100.0)
お彼岸	53 (43.4)	18 (14.8)	9 (7.4)	21 (17.2)	13 (10.7)	8 (6.5)	122 (100.0)
子どもの日	27 (22.1)	39 (32.0)	15 (12.3)	22 (18.0)	10 (8.2)	9 (7.4)	122 (100.0)
お盆	50 (41.0)	19 (15.6)	9 (7.4)	23 (18.9)	12 (9.8)	9 (7.3)	122 (100.0)
十五夜	30 (24.6)	17 (14.0)	14 (11.5)	28 (23.0)	23 (18.9)	10 (8.0)	122 (100.0)
クリスマス	82 (67.2)	23 (18.9)	8 (6.6)	3 (2.5)	0 (0)	6 (4.8)	122 (100.0)
七五三	45 (36.9)	7 (5.7)	24 (19.7)	17 (13.9)	12 (9.8)	17 (14.0)	122 (100.0)
誕生日	102 (83.6)	9 (7.4)	2 (1.6)	3 (2.5)	0 (0)	6 (4.9)	122 (100.0)
その他	まつり15、節分1、命日4 恵比寿講1、父の日・母の日1、結婚記念日2						

低比率が裏付けるように、〈お正月〉が今でもなお日本の代表的な伝統行事として、人々の生活の中に定着していることの表われと見なされる。

しかし〈ひなまつり〉については、〈お正月〉同様伝統行事ではあるが、「必ず作る」が27.9%と低く、「時々作る」26.2%を加えても54.1%で半数を僅かに越す程度である。これに対して「全く作らない」の10.7%や「ほとんど作らない」23.0%は全体の約3割強に相当する。従って〈ひなまつり〉については行事食が現在も伝承されているものの、特に重視されてはいないと言える。

〈お彼岸〉については、年二回の春・秋の仏事、仏参を抱括するが、「必ず作る」が43.4%、「時々作る」14.8%を算入すると58.2%で、全体の約6割を占める。しかしこれも「全く作らない」10.7%や「ほとんど作らない」17.2%が約3割になることから、先の〈ひなまつり〉同様、行事食として特に重視されてはいないものとみられる。

〈子どもの日〉については、「必ず作る」が22.1%と低く、同時に任意にあげたこれら項目の中

まず〈お正月〉については、「必ず作る」が93.4%で最も高い比率を示している。これは「全く作らない」0%や「ほとんど作らない」0.8%の

でも最も低い順位に当たる。しかし「時々作る」は32.0%で、これらの項目の中では最も高い比率を示している。従って〈子どもの日〉が国民の祝日として制定されてから未だ年月が浅いこと等を考慮すれば、これらの数値は〈子どもの日〉が行事として次第に定着しつつあるものと受け取ることが出来よう。

〈お盆〉については、「必ず作る」が41.0%で、「時々作る」15.6%を加えると56.6%になる。これは同じ仏事・仏参である〈お彼岸〉に順ずるものだが、「全く作らない」9.8%、「ほとんど作らない」18.9%を見ると、やはりこれも〈お彼岸〉同様、伝承されているものの、行事食として特に重視はされていないと言える。

また〈十五夜〉については、この傾向は更に著しく、「必ず作る」が24.6%で、先の〈子どもの日〉よりは若干多いが、「時々作る」14.0%を加えても38.6%にすぎない。これは任意にあげたこれら項目の中では最下位に当たる。反対に「全く作らない」「ほとんど作らない」は計41.9%で、行事食を作る比率を3.3%凌いでいる。従ってこれらのことから、日本古来の伝統行事

である〈十五夜〉は現在衰退しつつあると考えられる。

しかし次の〈クリスマス〉については、「必ず作る」が67.2%、「時々作る」18.9%を加えると86.1%で、全体の約9割近くに相当する。反対に「全く作らない」は0%、「ほとんど作らない」は2.5%で、その比率は大変低い。これは本来外来文化である〈クリスマス〉が日本人の生活の中に深く浸透したことを意味するものであり、殊に「全く作らない」が0%というのは、それを裏付けるのに十分な結果と言えよう。

〈七五三〉については、「必ず作る」が36.9%、「時々作る」5.7%を加えても42.6%で半数に満たない。しかしこの項目で最も留意すべき点は、行事食を作る、作らないの比率の比較以上に、「どちらとも言えない」19.7%や「無答」14.0%等の回答にある。これらは割合としてはいずれも低いですが、任意にあげた行事の中では最も高い比率を示している。つまりこれは、〈七五三〉が国民の祝日として特に制定されてはいないことも充分考慮すべきではあるが、人々の中で〈七五三〉が、行事及び行事食として認識の度が低いことを示すものであり、引いては今後伝承されにくい行事であることをも物語るものとみられる。

〈誕生日〉については、「必ず作る」が83.6%で大変高い比率を示し、「時々作る」7.4%を加えると91.0%で〈お正月〉に順ずる。更に「全く作らない」0%、「ほとんど作らない」2.5%は〈誕生日〉が行事及び行事食として人々の生活の中に定着していることを裏付けるのに充分であり、欧米的影響の点では先の〈クリスマス〉と同様である。

また〈その他〉として、まつり、節分、命日、恵比寿講、父の日、母の日、結婚記念日があげられているが、まつり、節分、恵比寿講は土俗、民間信仰を基盤とする謂わば日本古来の行事であるが、父・母の日や結婚記念日は比較的新しく、欧米的影響のもとに拡大した行事と言えよう。

更に以上のことを、行事食を「必ず作る」比率の高いものからあげると、1〈お正月〉、2〈誕生日〉、3〈クリスマス〉、4〈お彼岸〉、5〈お盆〉、6〈七五三〉、7〈ひなまつり〉、8〈十五夜〉、9〈子どもの日〉の順になる。これによれば、1〈お正月〉と4〈お彼岸〉及びそれ以下は概ね我国古来の伝統的行事であるが、これに対し、2〈誕生日〉、3〈クリスマス〉は謂ゆる外来行事であり、著しい商業主義の発達や欧米化との密接な関わりの中で定着した慣行と言える。従って当地域に於ける〈行事食〉は我国伝統文化と外来文化の混淆において伝承されていることが窺われる。

2 〈行事食の意味・いわれ〉—「行事食の意味ないし、いわれについて、お子さんに話してあげますか」

表D-2

たいてい話す	ほとんど話さない	無	答	計
65 (53.3)	45 (36.9)	12 (9.8)		122 (100.0)

上の表によれば、子どもに「たいてい話す」のは53.3%で半数を僅かに越す程度だが、「ほとんど話さない」36.9%を16.4%上回っていることになる。従って今日のような情報化社会の中で、家庭以外から得る情報の豊かさを考慮すれば、「行事食の意味・いわれ」については今後概ね伝承されてゆくだらうと考えられる。

3 〈仏壇・神棚・祠〉—「お宅には仏壇や神棚、祠がございますか」

表D-3

神棚+仏壇 +α	神棚+仏壇	神棚	仏壇	その他	無答	計
19 (15.6)	49 (40.2)	26 (21.3)	4 (3.3)	0 (0)	24 (19.6)	122 (100.0)

〈欄外〉α 及びその他としてあるもの

恵比寿 4 . 大黒 3 . 荒神 1 . 氏神 4 . お釜様 1 . 稲荷 5 . 山神 1 . 御獄様 1 . お宮様 1 . 天神様 1 . お釈迦様 1

まず上の表の見方について、〈神棚+仏壇+α〉は神棚と仏壇とそれ以外に祀るものがある

場合、〈神棚+仏壇〉は神棚と仏壇の2つを祀っている場合、同様に〈神棚〉は神棚のみ、〈仏壇〉は仏壇のみ、〈その他〉は以上に属さないものを祀っている場合である。更に欄外は、〈α〉及び〈その他〉の内訳を明記したものである。

そこでこの表を数値の高いものから見ると〈神棚+仏壇〉が40.2%で最も高く、次いで〈神棚〉-21.3%、〈神棚+仏壇+α〉-15.6%、〈仏壇〉-3.3%の順になっている。また更にこれを〈神棚〉と〈仏壇〉の各保有率で比べると、全体の77.1%が〈神棚〉を、59.1%が〈仏壇〉を祀っていることになる。以上のことから〈無答〉を除く80.4%の家庭では神棚・仏壇の一方または両方を祀っていることがわかる。更に〈欄外〉に祀られているものの種類は表のように多いが、これらはいずれも土俗・民間信仰に集約される。

3-(2)-「(ある場合) ごはんや水等、毎日お供えなさいますか」

表D-4 (1)で記入されている場合のみ

毎日供える	毎日供え行事食等も供える	行事食や旬のものを時々供える	ほとんど供えない	供えることはまずない	無答	計
59 (60.2)	4 (4.1)	29 (29.6)	5 (5.1)	1 (1.0)	0 (0)	98 (100.0)

供える理由

a. 家の習慣で	40(43.5)
b. 先祖や故人となった身内を偲んで	23(25.0)
c. 神や仏への感謝と家の幸福を願って	51(55.4)
d. その他	0(0)
無答	7(7.6)
計	121(131.5)

複数回答

まずこの表の見方について、任意に用意した回答項目はA-〈毎日供える〉、B-〈行事食や旬のもの、または特別に調理した場合など、時々供える〉、C-〈ほとんど供えない〉、D-〈供えることはまずない〉の4項目だが、集計時A及びBという複数回答があったので、これを予想される行動として考え、新たに〈A+B〉の回答項目を設けたものである。

これによれば、祠るもののある家の93.9%が何らかの供えものをしており、そのうち64.3%が毎日供えていることがわかる。更に〈供える理由〉としては、〈神や仏への感謝や家の幸福を願って〉が55.4%を占め、〈先祖や故人となった身内を偲んで〉25.0%を加えると、80.4%の人々が神仏や祖先に対して厚い信仰心を抱いていることがわかる。しかしここで留意すべき点は〈家の習慣で〉が43.5%を示し、〈先祖や故人…〉に順じていることである。つまりこれは、多くの人々が神仏や祖先に対して感謝や畏敬の念を抱きながらも、他方では「供える」という行為自体が形式化されつつあることを意味するものとみられる。

3-(3)-「(同様にある場合) お子さんにも供えさせますか」

表D-5 (1)で記入されている場合のみ

供えさせる	供えさせない	無答	計
54 (55.1)	28 (28.6)	16 (16.3)	98 (100.0)

また子どもについては、「供えさせる」が55.1%で「供えさせない」28.6%の約2倍に相当しており、子どもたちにも神仏に対する信仰心が受け継がれていることがわかる。

4 〈ことわざ〉-「食事中的ことわざについて」

表D-6

◎お子さんに話したことのあるもの

○御存知のもの

／御存知ないもの

	◎+○			／	計
		◎	○		
a. ご飯を食べながら背伸びをすると、 ご飯が腹に入らず背中の方に入って死ぬ	5 (4.1)	1 (0.8)	4 (3.3)	117 (95.9)	122 (100.0)
b. 肘をついてご飯を食べると地震がくる	9 (7.4)	3 (2.5)	6 (4.9)	113 (92.6)	122 (100.0)
c. 寝ころんでもものを食べたり、食べてすぐ横になると、牛になる	120 (98.4)	86 (70.5)	34 (27.9)	2 (1.6)	122 (100.0)
d. 一杓子で茶碗一杯のご飯を盛るな	61 (50.0)	3 (2.5)	58 (47.5)	61 (50.0)	122 (100.0)
e. 左手でご飯を盛るな	7 (5.7)	0 (0)	7 (5.7)	115 (94.3)	122 (100.0)
f. こぼした飯粒は必ず拾え、さもないと 眼がつぶれる	52 (42.6)	15 (12.3)	37 (30.3)	70 (57.4)	122 (100.0)
g. 朝食に汁をかけて食うと出世しない	48 (39.4)	8 (6.6)	40 (32.8)	74 (60.6)	122 (100.0)
h. お赤飯に汁をかけて食うと、結婚式や 葬式の日に雨(雷)が降る	48 (39.4)	12 (9.8)	36 (29.5)	74 (60.6)	122 (100.0)
i. 正月の七草粥と15日の小豆粥を吹いて 食ってはいけない。田植えの時大風が吹く	10 (8.2)	3 (2.5)	7 (5.7)	112 (91.8)	122 (100.0)
j. 箸から箸で食べ物を受け渡しするな	119 (97.5)	81 (66.4)	38 (31.1)	3 (2.5)	122 (100.0)
k. 風呂の中でもものを食うと親の死に目に 会えない	5 (4.1)	1 (0.8)	4 (3.3)	117 (95.9)	122 (100.0)
l. 食器を箸でたたくと蛇が入ってくる	39 (32.0)	13 (10.7)	26 (21.3)	83 (68.0)	122 (100.0)
m. 食器の口の欠けたものを食膳に出すと 客が不幸になる。女はお産が重くなる	5 (4.1)	0 (0)	5 (4.1)	117 (95.9)	122 (100.0)
n. 食事中、立って座席をあちこち移動すると、 嫁入り先が決まらない、嫁に行くと腰がすわらない	29 (23.8)	4 (3.3)	25 (20.5)	93 (76.2)	122 (100.0)
o. その他					
○箸を御飯に立てない。					
○仏壇の下りものを食べると良い子になる。					
○湯呑み茶わんで御飯を食べると貧乏する。					
○十五夜の下りものを食べると女の子は婚期が遅れる。					
○陰膳を供えると、供えられた人は食べ物に困らない。					
○御飯の上に味噌汁をかけると神様のバチが当たる。					
○朝食に汁をかけて食べると中気になる。					

※異って書き足しのあったもの

g「出世しない」→「良くないことがおこる」

h「お赤飯」→「炊きたて御飯」

k「親の死に目に会えない」→「河童にひかれる」

m「食事中立って座席をあちこち移動すると」→「食事の度に席を変えると」

l「蛇が入ってくる」→「乞食になる」

まず上表の見方について、初めにa～nは一般的な食事にまつわる故事を任意に用意したものである。◎は「子どもに話したことがあるもの」すなわち既に「伝承したもの」であり、○は「(自身に)既知のもの」で「子どもに話さなかった」を含意して「伝承しなかったもの」となる。またしかし◎は「子どもに話したことがある」以上「既知」を前提としているわけであるから、従って◎+○は既に「伝承していたもの」となる。更に/は「知らなかったもの」であるだけに「伝承されていなかったもの」として受け取ることができる。

そこで各項目について重点を概括すると、先ず◎+○はC-98.4%が最も多く、次いでj-97.5%，d-50.0%，以下半数に満たないが、f-42.6%，gとhが同数39.4%と続いている。そして◎+○に対する◎の比率を見ると、これは時間的経過の中で「伝承されていたもの」を「伝承した」つまり「伝承されたもの」の内容と度合を示すものであるが、C-「外面的態度の矯正」が98.4%：70.5%と大変目立ち、続いてj-「宗教的禁忌」97.5%：66.4%となる。また○については、全体的に数値が低く間ばらだが、その中でもd-47.5%，g-32.8%，j-31.1%，f-30.3%の順になる。更に◎+○に対する○の比率を見ると、これは「伝承されていた」にもかかわらず「伝承しなかったもの」すなわち「伝承されなかったもの」の内容と度合を示すものであるが、d-50.0%：47.5%が最も高く、次いでg-39.4%：32.8%，h-39.4%：29.6%となる。これらによればd-「宗教的禁忌」，g・h-「社会化への導入」の順になる。また◎+○及び○の比率は大変低いが、全

く「伝承されなかったもの」としてe-5.7%：5.7%，m-4.1%：4.1%を見逃すことはできない。従って以上のことから「伝承されたもの」と「伝承されなかったもの」とは反比例の関係にあり、同時に互いを裏付けあっていることがわかる。

以上の集計結果から地方都市における食習慣について着目すべきことは、日本古来の伝統的行事が、著しい商業主義化や近代文化の導入によって、それらと複雑に混淆しながらも残存していることである。つまりそれは〈行事食〉について、お正月やお盆等々の伝統行事の中にクリスマスや誕生日等の外来文化が圧倒的な勢いで定着していることによっても明らかである。〈故事〉については「外面的態度の矯正」に重点が置かれていること、更に現時点において既に消滅したものがあること等々から、これら一連の現象は、食文化の伝統的意義の消失を示すものと考えられる。

E. 総括

秩父市は既にふれたように、昔からの繊維関係事業の他に電気や精密機械の事業が盛んになり、観光事業にも力を入れるようになり、環境も少しずつ変化してきているが、大都市の生活と比べ「一戸建て」の家に住み、部屋数も「5部屋以上」の家が半数以上をしめていて、恵まれた住環境である。「核家族」化が進んだとはいえ、「複合家族」もほぼ半数もあり、食生活様式の知恵の伝承はまだ行われていると思われる。便利な生活や環境の変化による人間への影響は発達途中にある子どものからだに最も早くあらわれる。

かつては権威の象徴であった食事の場の座席も、「なんとなく」決まってしまう、テレビを見ながら、話をしながらの食事風景が普通になってきた。しかし、その食卓の前には父親は勤めの都合で姿がないのである。父親と子どもとのコミュニケーションの機会は少なくなり、子どもの教育は母親にまかせるという現代の家庭環境がみうけられる。又、少例ではあるが、現在問題になっているような「子どもだけの食事」は栄養のバランスがどうしても崩れがちになる。「主食、主菜、副菜がそろった食事」をしているのは、NHKの調査によると「家族全員」で食事している子どもでは、朝食56.7%、夕食の71.5%に比べ、「子どもだけ」では、朝食47.6%、夕食40.7%と低くなっている。

献立を決めるときにも栄養の面よりも、子どもの好みが優先されている。「かむことを知らない子」「骨折しやすい子」「落ち着きのない子」などをなおすには、子どもの好みに重点をおいている献立ではだめである。「今晚のおかず何にしようか?」という子どもへの呼びかけは、親子のコミュニケーションの一つでもあり、子どもに食事への期待と関心をもたせるために良いことだとは思いますが、一見、子どもの意志を尊重したかにみえて、実は主体性のない母親の生き方を投影させいることになる。約半数の家庭が庭などで野菜などを栽培しているのでその世話を手伝わせたり、収穫したあと野菜が料理されていく過程をみせることにより、子どもの食への興味をもたせることができ、心身ともに健全な子どもの育成につながることであろう。

“食事のときは、食事に集中する”ことは食のしつけに関する中心課題である。しかし食事の時間は長くなったものの、子どもだけの食卓が増加し、50%の家庭でテレビ視聴しながらの食事という状況から、“食事のときは、食事に集中する”という中心課題は実行されにくくなるのではなかろうか。目も耳も心も食事以外のことに奪われ、口の中に単に食物が押し込まれていくようであれば、いかに親が心をこめ、

工夫した食事であっても、単に空腹を満たすための機械的な行動となってしまう。食を通しての感謝や、いわゆる行儀、偏食の矯正などもこのような状態にあっては、子ども自身が確実に獲得していくことは困難であろう。食のしつけに関心を持つ家庭は多いが、しつけの状況を見直し、心の通ったコミュニケーションが可能な食事の場を設定することからはじめられる必要を感じる。

一年の生活を通して、様々な行事が行なわれ、そこに社会的、文化的、精神的伝承が具現されてゆく。商業ベースに踊らされるのではなく、行事の意味をしっかりと把握し、精神的土壌を肥沃させられるような経験を子どもが得られることが望まれる。

当地域の食行動、食習慣は、現代的側面の色合いを濃くしながらも、なお伝統を継承している側面をみせている。

誤

正

- P. 7 表B-2
 食堂18 (0. 4) → 18 (8. 4)
- P. 7 右側 上から20行目
 「家族が多いから、一緒に
 食べられないから」 → 削除する
- P. 9 左側 上から一行目
 箸置 → 箸箱
- P. 10 左側 上から6行目
 B → (b)
- P. 18 右側 上から10行目
 外来化 → 外来文化
- P. 27 表A-3
 常務 → 常勤
- P. 27 表A-4
 その他 → 無答
- P. 31 左側 表B-19以下4行目
 B → (b)
- P. 50 右側 上から20行目
 <祖母> → <子ども>
- P. 53 左側 上から10行目
 B → (b)
- P. 62 表D-6 ㊦ の◎+〇
 65 (15. 3) → 19 (15. 3)
- 研究報告 第9集、別冊を通して
 「複合家族」 → 「拡大家族」